

上野家  
276

御觸書目

西正月廿五日

丁未保人

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 1 2 3 4 5 6 7 8



天保八百年

此の風音は天竺の事、東の事、西の事、  
金剛の別所、後主の御方、金剛の御方、  
月番の御方、月番の御方、月番の御方、  
名方、月番の御方、月番の御方、  
秋改の御方、月番の御方、

附 月番の御方、月番の御方、  
大の御方、月番の御方、  
秋改の御方、月番の御方、





4

鄭公年級札子

收時所至  
之亦如  
今之  
東道  
之  
志  
於  
時  
大  
概  
也

五福之類  
你來看  
太妙  
眼  
不  
過  
新  
快  
意  
新

丁巳仲夏

五

張國治

上聖氣象。我之所願。兼而有之。

你為師之意

子後至沙山

止  
フ  
フ  
フ

黃山先生

前々様へ申上るは入念と上り申事  
書より後物をとりおぼしめし申上るは  
より候と申事

あつて、作られたり申上るは

あつて、役所

一、あつて、役所へ申上るは

あつて、役所へ申上るは

あつて、役所へ申上るは

五月十四

長江普光寺

町に修了住持と申す僧の住する所也此の寺

自來院と云ふ也此の寺は古くより僧の住する所也

下礼の寺と云ふは僧の住する所也

古くより

五月十七

長江普光寺

理意彼

青島航

少知外之也

少知外

少知外之也

下月也

新田所

新田所

新田所

新田所

日

原より先柳代柳あり山崎より先山崎あり

いふより先玉理も通ぬる時より先玉理も通ぬる  
いふより先玉理も通ぬる時より先玉理も通ぬる  
いふより先玉理も通ぬる時より先玉理も通ぬる  
いふより先玉理も通ぬる時より先玉理も通ぬる

清江先生

清江先生

清江先生

清江先生

清江先生

清江先生

清江先生

清江先生

清江先生

清江先生

清江先生

清江先生

清江先生

清江先生

清江先生

清江先生

清江先生

少頃去月有

白雲

李太白集

所同錄

所  
 下  
 通  
 橋  
 日

742

町

所官常々何事をなす  
世にふくむるは  
所官常々何事をなす  
油とて

而も山時海を仰りては  
あつた

きり

為最珍貴之品。其價亦甚昂。然若以收之。每以五分  
而為多者。錢也。軍上亦有收。其場格。則以五分者。  
其意亦在。作即為一分。五分。法政皆有其意。  
印表出。場曰。款者。一。後。觸。這。不。能。無。  
力。也。可。生。古。於。事。東。進。及。此。法。  
前。年。也。有。心。的。遠。空。款。下。後。小。  
大。一。通。里。八。利。所。神。也。代。友。和。德。之。新。  
也。海。從。可。見。不。能。有。面。

三月



一、  
...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...



德山集

傅山

蘇端明

子孫

有者後立之  
 時彼取之  
 亦非力而連  
 之在也

作其後也



為國事... 及... 列...  
... 國... 是...  
... 由...  
... 為...  
... 以...  
... 為...  
... 為...  
... 為...

長江東去浪淘盡千古英雄故壘深處三吳故址  
故壘深處三吳故址  
故壘深處三吳故址

傅山

卷之八

清

卷之八

長江東去浪淘盡千古英雄故壘深處三吳故址  
故壘深處三吳故址  
故壘深處三吳故址

卷之八

清

之別名  
下する  
時  
改  
新  
令  
...

一百

新

中

...

...

一 中如命斗

中如命斗  
中如命斗  
中如命斗

一 中如命斗

中如命斗  
中如命斗  
中如命斗

一 中如命斗

中如命斗  
中如命斗  
中如命斗

一 中如命斗

中如命斗  
中如命斗  
中如命斗



小麦 二斗

二斗 二斗

大麦 二斗

二斗 二斗

小麦 二斗

大麦 二斗

小麦 二斗

大麦 二斗





長江集

芳林苑

要

祝

物

秋

子  
子

于机

東邦

1

旌電

日唐詩

漢書卷之六十四上匈奴傳第六十四上

漢書卷之六十四上匈奴傳第六十四上

漢書卷之六十四上匈奴傳第六十四上

漢書卷之六十四上匈奴傳第六十四上

漢書卷之六十四上匈奴傳第六十四上

漢書卷之六十四上匈奴傳第六十四上

漢書卷之六十四上匈奴傳第六十四上

大正九年四月七日

書院 敬啟者 貴院 承蒙 惠賜 函件 敬啟者

貴院 承蒙 惠賜 函件 敬啟者 貴院 承蒙 惠賜 函件

下取 領受 謹上

為二

敬啟者

貴院 敬啟者 貴院 敬啟者

貴院 敬啟者 貴院 敬啟者

有法事也 其後高相宗孔法事 亦友也  
今多從 云依 信也 乃有法事也 故也  
禮後大 元利 入 故 未 子 故 未 也 意  
下 有 也 乃 有 也

二月 役所

有 通 信 乃 有 法 事 也 故 也

長 子 也





わいのちがふたつふたつと  
あふれあふれあふれあふれ

子

中百小兒



下  
に  
海  
軍  
大  
臣  
後  
藤  
有  
道

此乃  
 金剛

女席

張

志し通入の排多  
所傳新の杭多の横河通多  
あにやん

世に名を

計の奥の山は山崎の山  
甘くは接し別居の通て文多

長くはあち

奥の山  
山崎

中平よりなるは後代へ  
は別しき者なり又あは  
るゝ事あるは中平より  
又中平より別しと云

秋山  
芳野

中平よりなるは後代へ  
は別しき者なり又あは  
るゝ事あるは中平より  
又中平より別しと云

中平よりなるは後代へ  
は別しき者なり又あは  
るゝ事あるは中平より  
又中平より別しと云

中平よりなるは後代へ  
は別しき者なり又あは  
るゝ事あるは中平より  
又中平より別しと云

秋山  
芳野

夢

旅の野火の燃来金松皮の傷一寸の女

夢中錦の三升木花のささる金成木花の并に金

ち一通りお福

西二の役所

ち一通りお福の下の町に漢校のちお福の

あにち

長久保

一、わがやうな時勢に於ては、救済の道を求め、  
それによつて、救済の道を求め、  
いふまでもなく、  
あつた。

長江の舟

雲

傳馬所  
松名

あゝ老翁の心は時節を知らず  
あゝ老翁の心は時節を知らず  
あゝ老翁の心は時節を知らず  
あゝ老翁の心は時節を知らず  
あゝ老翁の心は時節を知らず

夢

夢

傳馬

夢

萬古之長河  
 東流到海  
 無時止  
 萬古之長河  
 東流到海  
 無時止

書

後、  
白、  
一、  
二、  
三、  
四、  
五、  
六、  
七、  
八、  
九、  
十、

是

四  
通  
人  
是  
遠  
近  
之  
方  
不  
揚  
其  
上  
海  
之  
人

東  
文  
通

何  
時  
能  
是  
否

何  
時  
能  
是  
否

何  
時  
能

是  
否



右通入一拾壹年一十月一

何日  
月

右通入一拾壹年一十月一

廿二日

今通入一拾壹年一十月一

右通入一拾壹年一十月一

廿二日

右。太。臣。別。却。後。所。為。柳。有。傳。方。也。  
丁。亥。在。柳。望。

傳。馬。所。

行。方。

甘。房。

柳。不。為。所。傳。

傳。馬。所。

行。方。

甘。房。

自。然。在。柳。望。

右之太長、新、後、而、一、子、也、  
下、有、如、此、上、一

桂木為室

役人面之  
服有輕  
重時為  
役所不  
宜

東坡

走

金之助

續金瓶梅

10

[illegible]

松石齋

有以爲言胡象去中上

此在乃字

大正五年四月

春  
入  
春  
入  
入  
入  
入

あまの

あまのうみ

あまの

あまの

あまのうみ

あまのうみ

あまのうみ

あまのうみ

あまのうみ

あまのうみ

あまのうみ

あまのうみ

去甲九子中  
 信家探踪  
 行例方  
 丁未

如左公上

時政

高木 久雄

42 春風之利也

李之

平定回疆

東御高子守り  
以係  
ハタケハ又

家子







宗廟中日月星辰之象  
刻畫於牆上以昭示之

書之於壁

此乃第一樓之象也

行坡造酒助殿

蘇東仁第一殿

名之曰仁德之殿

為平寧之樓也

上ノ...  
後...

...

...

去年...

...

...

高平三子

三子

年

子

信

朱

一

今古長連石如石如石  
書千石如石如石如石

何

源初生

17

功



13  
142

[illegible]

27

秘

6

傳馬所

知

石有光曰：好古者，時亦收新。此乃知古之益於今也。

手道うはあふふ

ふふふ

徳久

南二門なるが客易金ありといふ坂市中央  
及礼法より教訓なり祖より大徳平八郎并祖より大徳  
格由り教訓なり祖より大徳平八郎并祖より大徳  
月を及瑞の節俸月提す所ふ人相書

大徳平八郎

一年

一 歌油也 二 萬力

一 眉色細 二 萬力

一 額用 二 月代 三 萬力

一 服油 二 萬力

一 鼻 二 萬力

一 耳 二 萬力

一 文 二 萬力 中 萬力

一 文 二 萬力 中 萬力

一 文 二 萬力 中 萬力

秋形分甲之用

黑中陈陈威

系系用子水

人培松

年款动松也

颜程子水

也山松

皇山松

服

眉色白

齒牙白

舌白

唇白

面色青

年齒少壯而面青

脈沉而遲

此皆少陰之脈

也



眉毛如雪

月代為小鬚

公古不并威

之而一志用

後色長

年齡如松

顏青如雪

世之佳

服亦有二

遠くまで

月代若衆

古稀より

老翁の如く

出度候ふ所

年数長し

顔色も

丈夫なり

服たる

月夜夢遊歌詠集

鹿角一詠集

玄音寺集

玄音寺集

玄音寺集

玄音寺集

玄音寺集

玄音寺集

玄音寺集

一月代今迄

二云百乃然

三云百乃然

右者有於有くまき系、面至早、大坂町、新日

子、美及、いふう、一候、う、あ、隠、全、服、が、お、知、り

この御事、このや

右、由、候

公儀、此、土、の、方、町、中、に、う、り、候、以、上

あ、う、り、候、所、役、所

如魚之在水也 以是而為之 乃其所以為之也

可乎

長江

去年十月廿二夜甲州信麻の歌上り村吏の歌り人海原  
浪の音を教述云ふ迄おふい右忠三郎降口い上村人  
作道人初

一年齡之珍集

中

中國の事

歌

一月の終

果てしなく

眉を濃く

たずねた人へのけやけの跡は

そよ風を吹く水戸の空に

春日を待つ人

雨を待つ人

地を待つ人

空を待つ人

服があらうとて車中のや

ふくは 何と云ふ車中より

あうま 役所

あうま 何と云ふ車中より

あうま

長江

え

新米 ひとへに

大夏 ありけり

新米 ひとへに

大夏 ありけり

東の事

東の事

神の事

神の事

石の事

石の事

割の事

石の事

石の事

石の事

石の事

石の事



は度々敷成勢に祈禱し所礼仰供  
仰様も衆を御覧の事多敷きよき事なり

此等し安んじ

うきうき

辛酉年

石山にてもうたはるはなれり

明王を討て大目付の御出で  
沿御座りし者も御出でなれり

かき

長江

天

後方より

向ふ松本方面より新島田迄

後方より

向ふ所毎に電報中より入用

一後方より

け別々なる松本方面より

後方より

信濃

向ふ松本方面より新島田迄

後方より

信濃

時之自身處一志之人爲其成之道免商之心在子然  
 吾重以時有之也乃遠之海有業而於建以無貴人下  
 多其少以上

行舟記

五

長江集

一、志中十月  
二、傳是書  
三、產書

御女子校 卒業生 清水 辰

澤娘柳与花才发

真柳山養正

春風野中  
相觸

設所

役所

今更此  
此物乃  
漢林  
之  
觸  
上

五  
十

長江古流

文姬君侯亦謙一乘由書生不為計一昭為述上列  
名在

五

公方柳  
内府柳  
大納言柳  
御卷柳  
足利氏

服此方後以有月明如素上六分是乃一過而信止至信後

以爲內從

公綏  
何止  
此乎  
乃能  
以之

あゝ 涙新

あゝ 通ふ 物も 影も 涙 枯れ ぬ かな

あゝ

長江 春 風

あゝ 涙 乾く かな

あゝ 涙 乾く かな 涙 乾く かな 涙 乾く かな 涙 乾く かな

あゝ

森田 伊 子

實入馬漢上家後貴人の常儀を奉る如く誠を以て  
内務省に於て其儀を定むる事と爲す所を以て  
おぼしめす

あつて

長久保

一 奉る如く由も其儀を以て自ら及内務省の儀を以て  
儀を以て其儀を定むる事と爲す所を以て  
一 其儀を以て其儀を定むる事と爲す所を以て

一 奉る如く由も其儀を以て自ら及内務省の儀を以て  
儀を以て其儀を定むる事と爲す所を以て  
一 其儀を以て其儀を定むる事と爲す所を以て



人相書

右升正一廊

年數其少其多

形體其長其短

眉色淡其清

眼色清其明

鼻高其貴

耳大其富

口大其壽

舌長其福

齒白其壽

何命之有



辛酉年秋

秋分日

眉毛

眼

鼻

口

手

足

舌

齒

右

お茶及る茶うらまはるる茶の味を知らぬ人

曲りて

多し月

ふし海

公儀は 何れも何れも 何れも何れも

あつた

後所

お茶は 何れも何れも 何れも何れも

あつた

長江

更

お茶は 何れも何れも 何れも何れも

阿彌陀佛  
 清心念佛

南窓時談相傳之石相傳以石上

るるるる

長江安流

无

原  
 新  
 140

作師

あゝこの世もつねに時どき口舌紛争はつきりあるものなり  
 然れども古語に「争ふは争ふに過ぎぬ」といふを聞きし時  
 將に對面を以て争ふ人々を觀るに下々しくものごとく争ふ

予も押さへてゐる事もあるが、その中から選り抜いて、

一冊にまとめた。

森田修造

藤田修造

片岡良一

ふたつを、それぞれに、それぞれに、それぞれに、

それぞれに、それぞれに、

それぞれに、

森田修造

その中から選り抜いて、

一冊にまとめた。

是日通於東河後部自京來紅口村而後至

河

極其

十二月二日

出方樣

肉府樣

御書樣

御書中樣

御抄留名遊

御通分

二月

李俊

公儀張  
修和乃  
中  
うね  
乃  
乃

二

御渡所

[illegible]

三十一

長江雪

今度松平國瑞先生所撰國松系譜其卷八並  
作海内公傳爲一併題卷上第八卷外今藏  
新嘉坡海山堂物軒子之志以謝意謹爲

定海及朝鮮國より渡りて海防の要所

定海場所

有るは定海と云ふ海防の要所なり

日清戦争後定海は日本の所屬となり

朝鮮半島の南端にありて海防の要所なり

定海は日本の所屬となりて海防の要所なり

定海は日本の所屬となりて海防の要所なり

定海は日本の所屬となりて海防の要所なり

定海

定海は日本の所屬なり

石山原

其儀は 何れも町中より解はる

いふは 慢所

即ち是は 何れも町中より解はる

いふは

長江

新上越橋より常夜火盗用なり

為りて夜原より橋より通りあり

此自來水もあつた

をいふは



海軍部より海軍大臣に  
所屬艦艇の航行に  
の妨を及ぼすものありしを  
是より見ても、  
海軍部は、  
海軍の発展に  
努むる所なり。

海軍部

長官

近年海軍の発展は、  
直ぐに海軍大臣の  
所屬艦艇の航行に  
の妨を及ぼすものありしを  
是より見ても、  
海軍部は、  
海軍の発展に  
努むる所なり。



有

二  
三  
四  
五  
六  
七  
八  
九  
十  
十一  
十二  
十三  
十四  
十五  
十六  
十七  
十八  
十九  
二十  
二十一  
二十二  
二十三  
二十四  
二十五  
二十六  
二十七  
二十八  
二十九  
三十  
三十一  
三十二  
三十三  
三十四  
三十五  
三十六  
三十七  
三十八  
三十九  
四十  
四十一  
四十二  
四十三  
四十四  
四十五  
四十六  
四十七  
四十八  
四十九  
五十  
五十一  
五十二  
五十三  
五十四  
五十五  
五十六  
五十七  
五十八  
五十九  
六十  
六十一  
六十二  
六十三  
六十四  
六十五  
六十六  
六十七  
六十八  
六十九  
七十  
七十一  
七十二  
七十三  
七十四  
七十五  
七十六  
七十七  
七十八  
七十九  
八十  
八十一  
八十二  
八十三  
八十四  
八十五  
八十六  
八十七  
八十八  
八十九  
九十  
九十一  
九十二  
九十三  
九十四  
九十五  
九十六  
九十七  
九十八  
九十九  
一百

設所

永世長存

長江集

王

清飲集七卷  
卷之五

長年  
御  
代  
云  
々

新平古志下  
去後代  
和名  
今  
人

一 條 原 部 山 部 下

之 條 代 山 部 下

一 粟 部 下

之 粟 代 山 部 下

一 稗 部 下

之 稗 代 山 部 下

一 少 麦 部 下

之 少 麦 代 山 部 下

一 麥 部 下

之 麥 代 山 部 下

一 新 麦 部 下

之 新 麦 代 山 部 下

一 新 麦 部 下

之 新 麦 代 山 部 下

一 新 麦 部 下

之 新 麦 代 山 部 下

一 新 麦 部 下

之 新 麦 代 山 部 下

而全易於其端凡常盡之

江上  
行  
歌  
新

石魚山  
竹石山子黃  
子如龍  
上

643

長江集

京都人

移金与柳市东

臨氣全抱

3

壬午己未東年七月  
今月五日  
南陽城之云  
世修家少年

三十一日 東京 午後二時 友人  
より 手紙 一通 あり 内容 あり  
いふ こと あり

あつた こと あり 一 相 尋 する こと あり 相 尋 する こと あり

いふ こと あり 一 相 尋 する こと あり 相 尋 する こと あり

いふ こと あり 一 相 尋 する こと あり 相 尋 する こと あり

いふ こと あり 一 相 尋 する こと あり 相 尋 する こと あり

一 投石野田原極東

清井氏所居

今松島町

七 遠くより来る者

但 之 別 減 少 之 後 之 如

之 外 代 表 的 之 給 与 之

今 日 之 東 方 之 年 八 公

如 上

源 所

市井の喧嘩を聞きしに

遠くより来る人

ありしに

所々ありて今も

清くありて

ありしに

清くありて

ありしに

ありしに

長江の舟

長江の舟

ありしに

ありしに



東山柳柳東山又市田通  
東山通修師白山引  
通者東山同之友也

東山

東山

東山柳柳東山又市田通  
東山通修師白山引  
通者東山同之友也

收

車馬費

長江

元

一

新

云

周

中

六

是よりなりなりと三月

日別信託金三割なり

是より馬場後と別なり下  
ありなりなりと三月

是より馬場後と別なり下  
ありなりなりと三月

是より馬場後と別なり下  
ありなりなりと三月

日

日

日

日

日

日

日

是より城壁後二刻頃より  
是より城壁後二刻頃より  
少別路を以て別路

是より馬場後三刻頃より  
是より馬場後三刻頃より  
少別路を以て別路

是より馬場後三刻頃より  
是より馬場後三刻頃より  
少別路を以て別路

口

子

雅水川

日見道中

新

二

新

新

新

口

別邸 別令七別邸

是と後 別邸 別令七別邸

是と今 別邸 別令七別邸

是と今 別邸 別令七別邸

是と今 別邸 別令七別邸

別邸

別邸

別邸

別邸

別邸

別邸

是は江戸の御茶屋の別荘  
江戸の御茶屋の別荘

江戸の御茶屋の別荘

江戸の御茶屋の別荘

江戸の御茶屋の別荘

江戸の御茶屋の別荘

江戸の御茶屋の別荘

江戸の御茶屋の別荘

江戸の御茶屋の別荘

江戸の御茶屋の別荘

遠年迄 此 未 決 定 事 宜 一 切 用 意 申 上 候 事  
此 終 行 候 事 宜 候 事 宜 申 上 候 事

是 等 事 宜 候 事 宜 申 上 候 事  
申 上 候 事 宜 申 上 候 事  
申 上 候 事 宜 申 上 候 事

申 上 候 事 宜 申 上 候 事  
申 上 候 事 宜 申 上 候 事  
申 上 候 事 宜 申 上 候 事

長

申 上 候 事

申 上 候 事

申 上 候 事

申 上 候 事

申 上 候 事

申 上 候 事

是は江の口入の別所  
の別所なりと云ふ  
別所なりと云ふ

是は江の口入の別所  
の別所なりと云ふ  
別所なりと云ふ

是は江の口入の別所  
の別所なりと云ふ  
別所なりと云ふ

是は江の口入の別所  
の別所なりと云ふ  
別所なりと云ふ

江の口

入

別所

別所

別所

別所

別所



是とて馬場は別と  
あるよりありと  
別は別と別と

是とて馬場は別と  
あるよりありと  
別は別と別と

馬場は別と  
あるよりありと  
別は別と別と

馬場は別と

馬場は別と  
あるよりありと  
別は別と別と

成道

公儀 仙舟 舟中 上 初 陽 江 上

後所

ち 雲 山 仙 舟 舟 中 上 初 陽 江 上

舟 中

云

舟 中 仙 舟 舟 中 上 初 陽 江 上

舟 中 仙 舟 舟 中 上 初 陽 江 上

舟 中 仙 舟 舟 中 上 初 陽 江 上

理直氣壯

山使去

山使去月廿

而更時中月是

所司之樣由來山使去月是

山使去月是

山使去月是

山使去

山使去

山使去

はから月を照りてあかき  
おのころのふゆのふゆ

あかきふゆ

あかきふゆ

三

あかきふゆ

あかきふゆ

あかきふゆ

あかきふゆ

あかきふゆ

あかきふゆ

稗

八斗

小麦 四斗

大麦 三斗

小麦 二斗

大麦 一斗

小麦 五斗

大麦 三斗

小麦 八斗

大麦 四斗

小麦 三斗

大麦 二斗

小麦 一斗

大麦 五斗

小麦 三斗

212

正長江無邊

見

法  
宜  
明  
學  
為  
不  
少  
而  
多  
不

柳花村少宗礼少宗行柳十白少卷上

自光緒通  
江戶海戶  
相並拔除  
臨下  
其  
上

五

長江

七 九

山 虎 青 月 月

山 虎 青 月 月

山 虎 青 月 月

山 虎 青 月 月

山 虎 青 月 月

山 虎 青 月 月

山 虎 青 月 月

山 虎 青 月 月

山 虎 青 月 月

山 虎 青 月 月

松崎橋田邊村之町に於ては  
松崎の町に於ては

松崎の町に於ては

松崎の町に於ては

松崎の町に於ては

松崎の町に於ては

松崎の町に於ては

松崎の町に於ては

松崎の町に於ては

松崎の町に於ては

松崎の町に於ては

松崎の町に於ては

松崎の町に於ては



鳥巻に因りて  
月日

月日人 戸田親王御代に使者 佐々木氏に

高き高き御代に使者 佐々木氏に

高き高き御代に使者 佐々木氏に

高き高き御代に使者 佐々木氏に

高き高き御代に使者 佐々木氏に

高き高き御代に使者 佐々木氏に

高き高き御代に使者 佐々木氏に

高き高き御代に使者 佐々木氏に

高き高き御代に使者 佐々木氏に

高き高き御代に使者 佐々木氏に

高き高き御代に使者 佐々木氏に

高き高き御代に使者 佐々木氏に



清和天皇御

御

清和天皇御

御

清和天皇御

御

清和天皇御

御

清和天皇御

御

清和天皇御

御

清和天皇御

御

清和天皇御

御

清和天皇御

御

清和天皇御

御

清和天皇御

御

清和天皇御

御

清和天皇御

御

毫毛得所...  
如麻...  
九...  
...

...

...

實入馬...  
...

...

初地は山に湧き出づる水に  
清く澄みたる水に  
清く澄みたる水に

敵は門をくぐりて  
清く澄みたる水に

清く澄みたる水に

而しては  
清く澄みたる水に

清く澄みたる水に  
清く澄みたる水に

而しては  
清く澄みたる水に

清く澄みたる水に

清く澄みたる水に



日中  
高麗  
金鈴  
子  
子

三

後山吟

今夏月

三昧子

榮  
今幸而得此

三

後之

今或無之

武庫中

新集今古詩話卷八

子集

成部布七



五

學

南齊月令。客為企。而以。其。年。中。收。大。一。道。  
及。此。始。以。大。信。平。八。而。大。信。終。而。并。而。高。提。波。之。元。  
新。來。多。親。友。有。主。修。者。相。書。上。以。進。之。後。復。重。修。  
父。子。且。能。田。所。所。得。戶。口。良。安。之。處。抗。此。底。自。知。公。  
之。不。補。又。之。月。城。未。改。以。名。而。去。久。之。家。早。相。以。公。友。  
至。其。年。四。十。所。河。今。乃。其。世。與。之。注。云。此。乃。其。始。終。之。意。  
相。得。以。身。一。之。心。分。以。記。



五月

市河

子成は、今、市河、中、上、の、所、に、上、

有、る、と、所、に、

上、の、所、に、上、の、所、に、上、の、所、に、上、

有、る、と、所、に、

長、の、所、に、

目、録、の、所、に、上、の、所、に、上、の、所、に、上、

上、の、所、に、上、の、所、に、上、の、所、に、上、

修其所以為之者而後可以為之也  
修其所以為之者而後可以為之也  
修其所以為之者而後可以為之也  
修其所以為之者而後可以為之也  
修其所以為之者而後可以為之也  
修其所以為之者而後可以為之也  
修其所以為之者而後可以為之也  
修其所以為之者而後可以為之也  
修其所以為之者而後可以為之也  
修其所以為之者而後可以為之也

長江集

元



三見石

信

石見素月之

石見素月之

石見素月之

傳馬所

行

同

里





松後

東洋金太郎

可

石山寺の山門に於ては、大徳寺の山門に於ては、

大徳寺の山門に於ては、大徳寺の山門に於ては、

大徳寺の山門に於ては、大徳寺の山門に於ては、

大徳寺の山門に於ては、大徳寺の山門に於ては、

大徳寺

大徳寺

大徳寺の山門に於ては、大徳寺の山門に於ては、

大徳寺の山門に於ては、大徳寺の山門に於ては、

[illegible]

天機不可洩



由早より役所

あゝ道に仰ちる所へは後校にお預けの上

お返し

長江

参

一 小町

小町

一 吉原

吉原

一 浅草

浅草

一 大塚

大塚

一 雲上中

雲上中

一 小雲中

小雲中

一 直雲中

直雲中

一 新雲中

新雲中

一 古雲中

古雲中

一 雲中

雲中

一 雲中

雲中

一 雲中

雲中



張造の一日必し  
其の者之と云ふは  
吾れ非ざるもの  
を成ておるに上  
あまうや役所

方通在何市廣安在福之

上

長江集

佐川氏が所遊云々其書信を一所をふりて鳴鶴  
来りて止る事

今  
越  
使  
公  
儀  
子  
作  
而  
所  
定  
之  
名  
以  
爲  
之  
名

弱

五ノ下段

右之通言  
 作方子  
 乃通言  
 校言  
 是心  
 立心



一時渡ふと人の海なるも大なると強ひつて言合はん  
 是よりいふれども是も一時を言ふなり  
 一時渡ると言ふ所の横をいふと流すなりといふけとす

多くをよ

一昨より牛馬をばさるるまけとさなり  
宛まふりこなきて上乗のまを二推かとも  
能あゆみいぬふなりたはす乗院のま  
重はせんを乗のまなく枝るまの  
一昨よりゆのはのまのまのまのまのま  
けとさなりとけい

[illegible]

秋の暮つてゆくにつれて  
大空の青さが遠くへ  
秋の暮つてゆくにつれて  
大空の青さが遠くへ

~~~~~

秋の暮つてゆくにつれて  
大空の青さが遠くへ  
秋の暮つてゆくにつれて  
大空の青さが遠くへ

~~~~~

秋の暮つてゆくにつれて  
大空の青さが遠くへ  
秋の暮つてゆくにつれて  
大空の青さが遠くへ



一箇を愛せられたまふ、世の華をみよ  
まゝにまゝにまゝに

ふと病を流し、病を流し、病を流し、病を流し、  
病を流し、病を流し、病を流し、病を流し、

書付あり、書付あり、書付あり、書付あり、  
書付あり、書付あり、書付あり、書付あり、

まゝにまゝにまゝに

まゝにまゝに

右通に侍る者

あつて

咄とておかし

あつておかしな事もあるが、おかしな事もあるが、  
おかしな事もあるが、おかしな事もあるが、  
おかしな事もあるが、おかしな事もあるが、  
おかしな事もあるが、おかしな事もあるが、

おかしな事

おかしな事

おかしな事もあるが、おかしな事もあるが、  
おかしな事もあるが、おかしな事もあるが、  
おかしな事もあるが、おかしな事もあるが、  
おかしな事もあるが、おかしな事もあるが、

保古弱

夢

一古家老

一古家老

古家老

傳

新

古家老

古家老

古家老

古家老

古家老

花より色を重んずる

花より色を重んずる

花より色を重んずる

花より色を重んずる

花より色を重んずる

花より色を重んずる

花より色を重んずる

花より色を重んずる

花より色を重んずる

花より色を重んずる

花より色を重んずる

花より色を重んずる

Handwritten notes on the left side of the page, including the word "Mittelschule" and other illegible cursive text.

Handwritten text in the upper middle section, possibly a date or a short phrase.

Handwritten text in the middle section, appearing to be a name or a title.

Handwritten text in the middle section, possibly a signature or a name.

Handwritten text in the middle section, possibly a name or a title.

Handwritten text in the middle section, possibly a name or a title.

Handwritten text in the middle section, possibly a name or a title.



下巻

あはれと投新

あはれと投新 作あはれと投新 作あはれと投新

あはれと投新

あはれと投新

あはれと投新 作あはれと投新 作あはれと投新

あはれと投新 作あはれと投新 作あはれと投新

あはれと投新

あはれと投新

あはれと投新

あはれと投新

一 金

金

金

一 張

右 金 一 向 寺 脇 あり 松 林 後 へ 居 候

一 金

山 後 松 林 あり

右 金 一 向 寺 脇 あり

山 後 松 林 あり



一 後 拾 遺 記

（*Sanjimon*）

一 後 拾 遺 記

（*Sanjimon*）

一 後 拾 遺 記

（*Sanjimon*）

一 後 拾 遺 記

（*Sanjimon*）







為宗傳札并自丹波・河内・美濃・利澤・山陽・山集  
自・山陽・河内・丹波・上

今・山陽・河内・丹波・上・河内・丹波・上

五月朔

長江書院

為七・半・山陽・河内・丹波・上・河内・丹波・上  
山陽・河内・丹波・上・河内・丹波・上

五月朔

長江書院

此中以上所記乃由極難之處而得之義也  
此形之如法上

之

之

且先中禪寺演禪頂領年三月方為南無定印是蓮聖  
然中禪寺由方安金一祈禱一以言志者如月  
南日由禪寺一以依相得志者信一其未後  
後中禪寺方以相得志上

之

之

定

一 候 庚 八 日

南 方 之 雲 凡 南 方 之 雲

人 通 入 凡 通

人 通 入 凡 通 人 通 入 凡 通

人 通 入 凡 通 人 通 入 凡 通

人 通 入 凡 通

人 通 入 凡 通

人 通 入 凡 通 人 通 入 凡 通

人 通 入 凡 通 人 通 入 凡 通

人 通 入 凡 通

長江表裏

道達之所  
入江物  
水堀  
古長  
年  
新  
原  
大  
朱  
月  
郎

六月廿

多柳句平

五

一  
理

得勝  
新



白梅  
花  
香  
入  
心  
中  
不  
可  
忘  
也  
其  
花  
之  
香  
也  
清  
淡  
而  
不  
膩  
其  
色  
也  
素  
雅  
而  
不  
俗  
其  
枝  
也  
清  
瘦  
而  
不  
枯  
其  
葉  
也  
蒼  
翠  
而  
不  
老  
其  
香  
也  
清  
淡  
而  
不  
膩  
其  
色  
也  
素  
雅  
而  
不  
俗  
其  
枝  
也  
清  
瘦  
而  
不  
枯  
其  
葉  
也  
蒼  
翠  
而  
不  
老

一

花  
香  
入  
心  
中  
不  
可  
忘  
也

一

其  
花  
之  
香  
也  
清  
淡  
而  
不  
膩  
其  
色  
也  
素  
雅  
而  
不  
俗  
其  
枝  
也  
清  
瘦  
而  
不  
枯  
其  
葉  
也  
蒼  
翠  
而  
不  
老  
其  
香  
也  
清  
淡  
而  
不  
膩  
其  
色  
也  
素  
雅  
而  
不  
俗  
其  
枝  
也  
清  
瘦  
而  
不  
枯  
其  
葉  
也  
蒼  
翠  
而  
不  
老

*(Faint handwritten Japanese text, likely bleed-through from the reverse side)*

五  
六  
七

[illegible]

[illegible]

あま月

ふくむ役

ふくむ役

あま月

あま月

あま月

あま月

あま月

あま月

あま月

府内を遊覧し、法王殿、東門、  
東門、司馬、同、金、通、は、主、  
主、主、主、主、主、主、主、主、  
主、主、主、主、主、主、主、主、

ある

ある

ある

ある

ある

ある

此書は、  
小前編と後編とに分けられ、  
小前編は、  
小前編と後編とに分けられ、  
小前編は、

此

一、  
二、  
三、  
四、  
五、  
六、  
七、  
八、  
九、  
十、

一海主はなふと  
石も同く場下役なり  
はるまゝ家地灯頼る  
長男

一海主はなふと

右も同く場下役なり  
はるまゝ家地灯頼る

一海主はなふと

右も同く場下役なり  
はるまゝ家地灯頼る

三つね

傳馬所

右に來りて日名をうけり龍崎津邊より八里を渡

りて龍崎津邊より八里を渡

りて龍崎津邊より八里を渡

龍崎津邊より八里を渡

龍崎津邊より八里を渡

一里を渡りて

新田

ありて龍崎津邊より八里を渡

龍崎津邊より八里を渡

ありて龍崎津邊より八里を渡



何れもあつてもよい

あつてもよい

あつてもよい

あつてもよい

あつてもよい

あつてもよい

あつてもよい

あつてもよい

一、國に於けるは、  
おかしき事

さうか

おかしき事

去年、平遠に、  
奥羽に、

高、川、  
高、川、

高、川、  
高、川、

高、川、  
高、川、

高、川、  
高、川、

高平道元 舟中數日 忽有雨 經未幾  
遂舟 舟中又有一代領親親意云  
飯未盡 軍入之 相持良久 乃  
去 乃中 亦觸其 乃入 乃入 乃入  
人 乃中 乃中 乃中 乃中 乃中  
至 乃中 乃中 乃中 乃中 乃中  
乃中 乃中 乃中 乃中 乃中 乃中  
乃中 乃中 乃中 乃中 乃中 乃中

石之山  
石之山

石之山

石之山

傳馬

石之山

石之山

石之山

石之山

石之山

石之山

石之山



又由是而上

御機中

一

かま

右

書

一

中

用事

後

一

中

御機中

Handwritten text in a cursive script, likely a personal letter or note.

Handwritten text in a cursive script, likely a personal letter or note.

Handwritten text in a cursive script, likely a personal letter or note.

Handwritten text in a cursive script, likely a personal letter or note.

Handwritten text in a cursive script, likely a personal letter or note.

Handwritten text in a cursive script, likely a personal letter or note.

Handwritten text in a cursive script, likely a personal letter or note.

Handwritten text in a cursive script, likely a personal letter or note.

Handwritten text in a cursive script, likely a personal letter or note.





日  
月  
星  
辰

風  
雨  
雷  
電

山  
河  
大  
地

雲  
霧  
煙  
霞

花  
草  
樹  
木

鳥  
獸  
魚  
蟲

人  
物  
事  
物

天  
地  
萬  
物  
皆  
有  
其  
理

此 為 元

一 萬 七 千 七 百 七 十 七 年 一 月 一 日

時 為 同 年

一 萬 七 千 七 百 七 十 七 年 一 月 一 日

此 為 同 年

一 萬 七 千 七 百 七 十 七 年 一 月 一 日

此 為 同 年

一 萬 七 千 七 百 七 十 七 年 一 月 一 日

此 為 同 年

一 萬 七 千 七 百 七 十 七 年 一 月 一 日

此 為 同 年

一 萬 七 千 七 百 七 十 七 年 一 月 一 日

此 為 同 年

一 萬 七 千 七 百 七 十 七 年 一 月 一 日

此 為 同 年

一 萬 七 千 七 百 七 十 七 年 一 月 一 日

此 為 同 年

一 萬 七 千 七 百 七 十 七 年 一 月 一 日

此 為 同 年

一 萬 七 千 七 百 七 十 七 年 一 月 一 日

劉侯車下書 江表

即教駕車日

清無城

柳深并家並行恒亦居書及城不追

石子入水以他場斷其前以中入海

五八

長江

德至松陵一選此月北不教一汝望之停

分多又高年市多信似在

此所教乃見以古公之...  
名親一全授意及相尋...  
長

皮所

今...  
長

...

...

...

...

長城より遼東道後柳原系家重官一見  
ふふふふふふふふふふふふふふふふ  
ふふふふふふふふふふふふふふふふ  
ふふふふふふふふふふふふふふふふ  
ふふふふふふふふふふふふふふふふ  
ふふふふふふふふふふふふふふふふ

あハハハハ

長江音

進み上り水知し各法下し  
あふ水知し各法下し  
あふ水知し各法下し  
あふ水知し各法下し  
あふ水知し各法下し  
あふ水知し各法下し

和歌山松之儀

元

清之少

今更月形来之音優割合事由之通南分国以云

何甘の月と何と音来此月と云ふは終に何と云ふ

こゝを南割合儀致南結は威分事音定下所定す

一より就至のり一以以上

ありたり

相本及至

長江

天

一 漢武拾遺書の由り

一 漢書の由り

一 金史の由り

一 唐書の由り

一 宋史の由り

一 明史の由り

一 清史の由り

一 海より入るなり

西より入るなり 中門より入るなり 執事所より入るなり 寺より入るなり

一 後拾へるなり

一 西より入るなり

一 西より入るなり 西より入るなり 西より入るなり

一 後拾へるなり

一 西より入るなり 西より入るなり

一 後拾へるなり

一 西より入るなり



而通則合中七極本及意自  
其立之有由也

而

塔剛

殿神乾

而城少道而形為多之見上之新時  
形之所即事以既而之知官者所  
其皮之毛門極陳之其也其也其也

是書及不修廢少朱子稱之為心法而人不知

一、自以爲口實，故多爲此等事，此其所以爲人所不齒也。

あはれ

長江秀逸

明之為風，有以通於萬物者。丹是也。其  
所自來，乃古之所謂風者也。然則風之



リ  
ー  
エ  
イ

煙  
草  
の  
味

明  
子  
の  
眼  
は  
青  
い  
花  
の  
心

清  
道  
の  
花  
は  
紅  
い  
花  
の  
心

う  
る  
さ  
い  
花  
の  
心

リ  
ー  
エ  
イ

花  
の  
心

三

一  
二  
三

花  
の  
心

廣文堂十日迄後、以所貯、東内、新書、世系、  
公、代、分、別、合、計、方、々、以、因、以、上

リ、上、下

徳永、夏、吉、通、  
東田、何、通、  
長江、何、通、

通、日、春、永、分、別、後、以、所、貯、東、内、新、書、世、系、

江戸、海、道、松、並、町、掃、屋、一、坊、の、所、に、以、て、日、終、り、  
以、て、元、之、新、日、方、々、及、入、所、に、以、て、以、て、以、て、以、て、

名也其則曰後山以上

~~~~~

長江

飯柳南見所據城方以戶海道松重云其地通東

往還柳條入系其九云其地有松重云其地通東

後人其地世往還乃其地有松重云其地通東

後人其地世往還乃其地有松重云其地通東

~~~~~

長江

奉令張之介引者并到張前之汝南李月記也

此乃自張東中十月申初能亦交進之引張視錄

清之之廣亦亦亦亦之勿偏大引張乃之引難實亦可

相之次引以是是也金并之字或引引張乃之引者亦

道法相滿引之金而亦亦之引之引之引之引之引之

之引之引之引之引之引之引之引之引之引之引之

此乃自張東中十月申初能亦交進之引張視錄

清之之廣亦亦亦亦之勿偏大引張乃之引難實亦可

相之次引以是是也金并之字或引引張乃之引者亦

道法相滿引之金而亦亦之引之引之引之引之引之

之引之引之引之引之引之引之引之引之引之引之

此乃自張東中十月申初能亦交進之引張視錄

清之之廣亦亦亦亦之勿偏大引張乃之引難實亦可

相之次引以是是也金并之字或引引張乃之引者亦

道法相滿引之金而亦亦之引之引之引之引之引之

桐白

所種之木其官社所祀之神也

祭

七月

中沙

不識其竹者以爲中土之竹也

設本

竹之爲物其性剛直而節有常

一

長以爲

世之題用合其意者其爲竹者有矣

日本銀行の通貨券は、中央銀行の命令で発行され、  
その有効期間は、通常は10年以内である。  
銀行は、この通貨券を、銀行間の取引や、  
銀行と顧客との取引に使用することができる。  
銀行は、この通貨券を、銀行間の取引や、  
銀行と顧客との取引に使用することができる。  
銀行は、この通貨券を、銀行間の取引や、  
銀行と顧客との取引に使用することができる。

日本銀行の通貨券は、中央銀行の命令で発行され、  
その有効期間は、通常は10年以内である。  
銀行は、この通貨券を、銀行間の取引や、  
銀行と顧客との取引に使用することができる。  
銀行は、この通貨券を、銀行間の取引や、  
銀行と顧客との取引に使用することができる。  
銀行は、この通貨券を、銀行間の取引や、  
銀行と顧客との取引に使用することができる。





即海濱

西七月

即海濱

即海濱

即海濱

即海濱

即海濱

即海濱

公儀止 以 寺 乃 町 中 乃 今 明 陽 乃 上

収所

市 全 法 以 前 乃 町 乃 廣 城 乃 明 陽 乃 上

り 々 々 々

長江首尾

市 乃 城 乃 上

市 乃 城 乃 上

補収

市 乃 城 乃 上

市 乃 城 乃 上



南無日如来

即無城より言并所同に信じて不引用達と云ふ

思悦例と云ふ

此等所断に其類は性也との事

此所引之臨所并其同達有之と云ふは外に

ある

長い書

三

敬儀

市為城一長吉病家と云ふ

所引之は其類也

竹のうら明の如く自に毫毛の如く

~~~~~

長江の如く

敵様は海賊の如く通る所を奪ひ取る

如く討ち死すは重く此の如く死すは軽

く此の如く死すは重く此の如く死すは軽

以上

~~~~~

世に名を

此後より中町日暮のうらやま  
山崎の山崎金太郎のうらやま  
山崎の山崎金太郎のうらやま  
山崎の山崎金太郎のうらやま

山崎金太郎

山崎

山崎金太郎のうらやま  
山崎金太郎のうらやま  
山崎金太郎のうらやま  
山崎金太郎のうらやま

山崎金太郎

山崎金太郎

山崎

山崎金太郎のうらやま  
山崎金太郎のうらやま  
山崎金太郎のうらやま  
山崎金太郎のうらやま

望  
中  
不  
可  
少  
也  
之  
中  
氣  
多  
相  
感  
而  
生  
之  
氣  
也

子

長  
江  
水  
也

愛  
入  
馬  
溪  
止  
書  
所  
并  
前  
氣  
清  
明  
人  
事  
如  
新  
對  
舊  
時

上  
月  
月  
光  
下  
地  
空  
乃  
為  
可  
集  
之  
有  
別  
語  
言  
連  
之  
也

湖  
水  
清  
上

子

長  
江  
水  
也



由西平之江波より来るものありて  
其の形は人形に似たり。其の  
長さは一丈二尺あり。其の  
幅は二尺あり。其の厚さは  
二寸あり。其の色は白く  
光りて、見るに似たり。其の  
名は「白蛇」なり。其の  
住むところは、山や谷に  
あり。其の食は、虫や小  
魚なり。其の行は、蛇に  
似たり。其の死は、人に  
殺されたり。其の生は、  
卵より生じたり。其の  
長さは、一丈二尺あり。其の  
幅は、二尺あり。其の厚さは、  
二寸あり。其の色は、白く  
光りて、見るに似たり。其の  
名は、「白蛇」なり。其の  
住むところは、山や谷に  
あり。其の食は、虫や小  
魚なり。其の行は、蛇に  
似たり。其の死は、人に  
殺されたり。其の生は、  
卵より生じたり。

白蛇



何事一也 如月移川以  
就并多須房免動 今收者  
以有又手所一也

何事一也 如月移川以

里人

何事一也 如月移川以  
就并多須房免動 今收者  
以有又手所一也

~~~~~

長江書院

何事一也 如月移川以  
就并多須房免動 今收者  
以有又手所一也

之

御糸礼月并八月より上り當り、各々  
廻り、乃ち、各々、事、成、は、成、り、初、刻、に、  
相、談、に、上、り、可、い、方、に、通、

一、場、に、貴、方、と

傳、馬、所、

有、通、り、お、通、り、に、お、い、ら、せ、

九月、

中、原、君、六、

此乃法華

御公儀様遠代方所年寄所書海諸入用  
刻合并御外可治泊入用有刻合の旨  
當月丁丑十日方迄二度迄の旨有刻合  
之内三度迄書出に成を一度迄書出に所  
出指し次方書出に成

一合五十七兩

所年寄所出用入用

臺二拾兩格

御神馬由泊入園長とては是れお初め  
若しお余りいふと相成る刻に  
言

今半七あり 此の事新しき事なり

臺軒役

お説る事いふ事なり

一書四角或ふ

万四千九

傳ふ所

九月言  
九月言  
九月言

貴

一全書武家

後拾四書百十六

在九月日走

諸門之極也登山入用

回一分武家

得十四更乃松六

右回折下山人利

二

一合或一ふ或本

得或中ハ多或る三拾或

為後四十二ノなるハ

二方中ハ別  
一動後ハなる正ニハト

一之或二十

得三所



此月朔日入用也其内多其月朔令之也

酉九月終

點笑方

此月朔日入用也其内多其月朔令之也

九月四

辛酉



同光

師同往。得。通。如。此。何。處。名。什。松。年。  
 下。編。考。林。明。得。如。方。希。十。上。事。如。通。行。行。  
 以。通。如。用。之。掃。除。如。付。此。如。何。如。何。痛。苦。至。  
 今。此。今。如。下。如。付。此。如。

九月

植牙書

美

一 漢家老婦

一 漢家老婦

一 漢家老婦

一 漢家老婦

一 漢家老婦

一 漢家老婦

一 漢家老婦

漢家老婦

漢家老婦

漢家老婦

漢家老婦

漢家老婦

漢家老婦

右ハ昭々見 仰向様面如鏡

此等様面如鏡なるは平敷の信守

安宅の舟橋の東門の舟橋

此等様面如鏡なるは平敷の信守

此等様面如鏡なるは平敷の信守

御書

一、由上海至南京

一、由南京至杭州

一、由杭州至绍兴

一、由绍兴至宁波

一、由宁波至温州

浙江

浙江

浙江

竹素書

上卷

右者東海之海也其水廣闊不可  
計其深淺也其水之清濁也其  
水之鹹淡也其水之冷暖也其  
水之動靜也其水之生息也其  
水之長短也其水之存亡也其  
水之變化也其水之神妙也其  
水之不可測也其水之不可  
測也其水之不可測也其水之  
不可測也其水之不可測也其  
水之不可測也其水之不可測也

植桑在東

甚平殿

御衣老極

出物以道

御衣以極

出物以

出物以

下月付

光

新國

本所

新國

本所

本所

本所



西陽子元 清溪水樓台 綠花紅草

竹花開 北山 綠草 高平 綠草 綠草

元 傳 南 東 東 南 西 東 南 西 東

元 傳 南 東 東 南 西 東 南 西 東

元 傳 南 東 東 南 西 東 南 西 東

九

元 傳 南 東 東 南 西 東 南 西 東

元 傳 南 東 東 南 西 東 南 西 東

學

一 祭禮 大樽入 出 火 之 列 入 急 報  
 一 中 付 以 爲 大 樽 出 火 之 列 入 急 報  
 一 大 樽 入 火 之 列 入 急 報

宗禮前夜分此書所加書字盡當自所自

一、地刑是物、今、地、名、之、吟、味、之、上、人、審、故、之、の、

一、各禮之白話

御城門の南に給殿あり  
急度可卜付供事

一往還處而云往來者處取象相對不相法也  
之一字乃月之事

右、趣來、正急度、  
之、  
此、

九月

北  
卷  
五

張氏

新百本，為他多。中。所。以。此。為。此。此。  
 之。少。到。所。為。名。又。之。何。到。附。物。也。力。  
 江陽。山。陰。之。有。之。

作水要緊

參禮渡日  
城十日相渡中  
夜方出  
如  
何通  
作  
身  
可  
此  
後  
取  
知  
夢  
不  
疲  
心  
上

西  
九

夏江草堂

室親迎而後哭  
 交之校  
 前格心  
 西九月  
 杜木  
 歲回信

梅木多葉  
 歲時信來  
 黃以寧

人而食其西方海國之懷以事其  
 人而食其西方海國之懷以事其  
 人而食其西方海國之懷以事其  
 人而食其西方海國之懷以事其

八月 徳川幕府 右大臣 将軍 幕府

公儀 仰 命 所 中 三 總 領

九月 改 新

九月 通 信 出 身 明 々 漢 語 一 本 記 述  
長 江 記 述

高平  
山  
山  
山  
山  
山

元

山  
山  
山  
山  
山

[illegible]

町  
三



松平藩奥書  
間合人！  
安  
未  
附  
九月

後

東山寺接明十八當所  
地上一族能食草  
閩省接下獨閩  
一

九月十七

一法家老極

一清高師人

廿九日

植寸草為心

傳一  
新石  
小

聖廟殿

北庭目下  
下目下

右支日老

新石所

新石所

津門樣石古一以下山為新一水泊

法優之故之區為一山之志理廣一

八小時之故之區為一山之志理廣一

法優之故之區為一山之志理廣一

八小時之故之區為一山之志理廣一

一、  
...

所  
...

曹  
...

~~...~~

...

...

...

...

...

...

...

...

...

法  
書  
老  
藏  
竹  
月

古  
傳  
傳

剥離紙片

左邊今十人  
作

右邊今十人中、

九月十八日 後所

右邊今十人中、

御谷今十人中、

は

要

明正統九年九月  
初八日  
奉  
聖  
旨  
欽  
此

國史館

卷之九  
明正統九年九月  
初八日

臣等

大徳寺 山門

大徳寺

大徳寺 山門 大徳寺 山門

大徳寺 山門 大徳寺 山門

大徳寺

大徳寺

大徳寺 山門 大徳寺 山門

大徳寺 山門 大徳寺 山門

大徳寺 山門 大徳寺 山門



大... 時... 著... 及...

波... 可... 知... の...

... 後所

命... 行... 所... 後...

...

後...

...





何れも一に遠くはれり人用なり

あつた

何れも一に遠くはれり人用なり

あつた

何れも一に遠くはれり人用なり

あつた

何れも一に遠くはれり人用なり

あつた

月  
は今日より明日

より明日より

より明日より

より明日より

より明日より

より明日より

より明日より

より明日より

より明日より

より明日より

より明日より

三

高し給ふ所  
水取はく

田中

市並に竹をとりて

十

市並に

市並に竹をとりて

十

市並に

市並に竹をとりて

昔々佛上集ふとていふ書月う光の如くの上

あふひ

殖木友吉

高年夫族国を熟くしとて近年遠地お帰るべき

身道及沙路のときとて中相協以通承る道とて

横をえお願ふとて己年己未のとて物とて以城居る道

来ひとてとて道とてとて横勿偏切とてとてとてとて

りたてとて道とてとてとてとてとてとてとてとて

[illegible]

之

一、法至方以爲善其方流不爲積也。以海爲善是爲積也。凡一

此と海邊に於て日下一海を以て年一而之を車一平一連之海  
海と云ふは海邊に於てありて其の海と云ふは海邊にありて  
人其の海邊にありて海と云ふは海邊にありて海と云ふは海邊にありて  
其の海邊にありて海と云ふは海邊にありて海と云ふは海邊にありて  
海と云ふは海邊にありて海と云ふは海邊にありて海と云ふは海邊にありて  
海と云ふは海邊にありて海と云ふは海邊にありて海と云ふは海邊にありて

九月

海邊



出儀 仙 何 止 山 所 力 云 何 所 在  
ありき 後 所

市 生 仙 何 止 山 所 力 云 何 所 在 何 止 山 所 力 云 何 所 在

ありき

徳 東 夏 古 通

男 子 一 札 事

一 御 来 手 信

筆 箋 冊

西 江 屋 年 通 毛 燭 控 平 方 分 山 備 用 人 云 云 云

利人成己之善行也。其心之  
而善也。通乎天。其心之  
之善。人皆知之。其心之  
之善。人皆知之。其心之  
之善。人皆知之。其心之

十月廿二日

一

一

一

[illegible]

三

陳永成

補性有可為其  
 子之益也  
 每以望

多かりし

多事吾兄

[illegible]

1

李氏

自教机満る月  
中従る光る

作  
少  
母

而るる好るる時中役新く  
其別作るる帝  
星

一

徳平夏通

此のまゝの心を張るる時  
繼れおるる一  
如く

安

[illegible]

ふたつに ひとつは ひとつは ひとつは ひとつは ひとつは

ふたつに ひとつは ひとつは ひとつは ひとつは ひとつは

ふたつに ひとつは ひとつは ひとつは ひとつは ひとつは

ふたつに ひとつは ひとつは ひとつは ひとつは ひとつは

ふたつに ひとつは ひとつは ひとつは ひとつは ひとつは

ふたつに ひとつは ひとつは ひとつは ひとつは ひとつは

ふたつに ひとつは ひとつは ひとつは ひとつは ひとつは

此等門庭亦不為奇

自是書之則得之而彼以如作則之入其於法合者

志也

此等門庭亦不為奇

此等門庭亦不為奇

此等門庭亦不為奇

此等門庭亦不為奇

此等門庭亦不為奇

くまのしん

五方之志每願當時之方更求之通行於  
 今之世自方書之來之紙札之為之者未  
 慢也按定本紙札之版底之紙札之

恒通、我輩又未嘗入此紙中、故也。其理。

町々市街に於て鳴るる鐘は  
 今や市街に於て鳴るる鐘は



あはれなる心（一）

あはれなる心（二）

あはれなる心（三）

あはれなる心（四）

あはれなる心（五）

あはれなる心（六）

あはれなる心（七）

あはれなる心（八）

此は我が家の名に因りて名を付し置けり  
に成り候に

作はるべき事なるは月日事なる事候に  
之様なり付し置けり事なり切に候に  
月日事なる事候に事なり切に候に  
切に候に事なり切に候に  
十月

長





右之類は 終止の方町中へ 至るなり

百十一百十二 後新

右之類は 作らる可く 不成候

一に相觸り候上

十月十日

長江寺住持

夏之儀は 番役 丹波守の御役 未だ 未だ 未だ

未だ 未だ 未だ 未だ 未だ 未だ 未だ 未だ 未だ 未だ

大朝興...  
...

西...  
...

...

...

...

...

...

...

...

...

其言多扶老渡り方六つ例本、用、

の程下冊にもあるなり

十月十日

あはれ

あはれ用ひるなり、此は、あはれ用ひるなり、  
十月十日

あはれ

あはれ

あはれ

一 重なる

右の各字倒るるは其の字の形に似てゐるが故に

一 類の

右の各字は其の字の形に似てゐるが故に

一 或る字の形に似てゐるが故に

右の各字は其の字の形に似てゐるが故に

一 又

右の各字は其の字の形に似てゐるが故に



三々々々々

心平氣和の如く静かにして居る人々

一々々々々

心平氣和の如く静かにして居る人々

心平氣和の如く静かにして居る人々

心平氣和の如く静かにして居る人々

心平氣和の如く静かにして居る人々

一々々々々

心平氣和

あゝいづれも人の世は夢の如きものなり

まゝあつてゐるが、いづれは

あゝいづれ

あゝいづれ

あゝいづれ

あゝいづれも人の世は夢の如きものなり

まゝあつてゐるが、いづれは

あゝいづれ

あゝいづれ

あゝいづれも人の世は夢の如きものなり

あゝいづれ

才之可及也

子

明方終弟。國為。月。主。形。刻。處。如。編。積。一。  
在。後。倍。致。一。形。清。若。烟。明。之。字。時。大。月。自。去。  
心。甘。下。口。如。也。

上之終

松木

付度新親收立と作付いふも判し錢十一月  
 朔日後通用致座といふ判し一ヵ月より同月十日  
 迄追々司事うきを有具に各判し取らざる  
 及沙汰する新令兩便傳方渡方あるもの  
 中律通用可段上納金茂アの目程事  
 小判を安引取り候たとて皆小判皆を安引とし  
 小判七匁を安引三匁の割合にいりむい  
 儀条十一月十六日別紙よりあり申す候へども

引替り

一 氏名をいふ。所人相對し、  
一 付冬の家

そのとも方々を引替り、  
一 脂は次

一 山割を引替り、  
一 負教を引替り

引替り、  
一 引替り

引替り、  
一 引替り

引替り、  
一 引替り

引替り、  
一 引替り

世上通用のもを位官より銀を新銀を男婦  
吹立る位付り右一歩銀四まい令一兩に積む銀  
錢とある或本邦同様は割合におるは其幣通  
用可なり

一通用銀の儀數及吹立る 作上の條も其  
是の如く通あるは其下通用の枚数を引換  
張の如く通あるは其下通用の枚数を引換

一或本邦一兩銀通用の儀は其の如く通あるは其下通用の枚数を引換

二条館へ儀無任適用停止

侍出

万葉集よりとらん侍

石之趣國へておるなり

十月

石之趣國へておるなり

石之趣國へておるなり

石之趣國へておるなり

石之趣國へておるなり

古金銀文字二方刻古一書張者今金木口書所  
之儀書十月也

皮さへ引書張さへり方引書所へ儀張又書  
戌十月也書張へ通さる書余古張今書  
而持者今來戌十月を張者度引書さる

一尊字二方刻へ儀も書張今同様通書通書  
了儀作者不持へるの久儀後三書張所  
并い今金木口書さるる方引書張者今



以者大之用

石之通遠國未近即未心以輕法銀之御

竹官私臨主地頭入志了付以

十月

有之趣乎哉

方題於

公義  
傳  
中  
上

五  
古  
月  
之  
假  
所

右之通に倭を以て不可し不渡候事お断いの上  
西 十月廿二日 長崎番付

光

兵部行司  
中役云々  
作付云々

渡迄来吉

右之通に相付いふ所はらぬ船として  
十月廿二日 役所

右之通に 作付いふ所にてお断いの上

土月廿八

吉以之

得

為月年中出まふ人

重何方、つるまゐる書付を誰降る商

屋妻持借屋と祈る事

為年中欠る為勤るは前村

何月中書付屋妻持借屋と祈る事

文つるまゐる書付を誰降る商

何付者

主税。支税。の。り。の。事。

右。支。税。の。通。事。四。回。の。有。り。候。以。書。付。

と。申。上。り。上。

西。土。月。朔。

量

長。江。署。在。所。

一。米。五。百。石。

但。十二。月。の。間。に。

作。金。入。の。納。百。石。並。切。れ。

右へ通入れは神の成りゆきなり  
之は役所は元可なりなり  
十月朔

長江書

形方極難固病と云ふこと  
時ふふふふふふふふふふ  
ふふふふふふふふふふ  
ふふふふふふふふふふ

書

所  
京  
御  
所  
御  
所

松  
山  
御  
所

所  
御  
所  
御  
所  
御  
所

所  
御  
所  
御  
所

所  
御  
所  
御  
所  
御  
所

所  
御  
所  
御  
所

松  
山  
御  
所

世

人々を人々

信

信

信

人々を人々

信

信

人々を人々

信

信

信

信

受

一油在車中以

但明公家礼  
代金十兩

右通入礼儀拂去頭小百金也

元一渡及訓入礼儀也按手力計云

十二月七

受



買入馬錢は富非錢并 泰為口前残り  
泰十廿期又の附々四の付連し月日るに勤  
造方より取立りる右刻依るる通にお  
物の至

十一月十六

長い書(書)

あきうし...  
衣...  
平...

京都...  
...  
...

あまのうへに  
日にかへりて  
あまのうへに

あまのうへに

あまのうへに  
あまのうへに  
あまのうへに

あまのうへに

あまのうへに

あまのうへに

あまのうへに

あまのうへに

あまのうへに

あまのうへに

大隋書院政教令書  
 州縣通志  
 史記  
 方輿  
 地理  
 志  
 卷之  
 一  
 序

以武治

たのきやう 町公儀や年頃流し割合あは  
あはれきやうやうやう 通ききり根もとあはれ

ふかき割

きり根もとあはれ

・ ちきりやう

あはれ

あはれきやうやうやう 通ききり根もとあはれ

あはれ

あはれ

未戌正月

法林は年即中上醫師組之長也  
法見は法用達可人玄例は通名あり書  
徳の後十四止。自分定より上は清平頭  
中上者。因代は有る。是より彰書十四  
とてなる。此上

乙丑月十二

長江書

長江書

世

傳

小

海

法

林

吳

新

梨

真

傳



永平府志卷之四  
風俗志

卷之四

外庫教習

傳志  
年表

外庫教習  
年表

外庫教習



正月連人、取上りて其方の前へ

侍あり通るゝ元、儀跡、金に様、舞子も、合、

急なるもの付

右、趣、相あり方、申、は、ま、獨、い、ひ、上

る、正月、は、役所

み、通、り、仰、あり、方、可、く、不、浅、様、を、お、お、

は、

ま、は、り、

ま、は、り、

去辰年の所より、我が焼酎借金主の  
上領より、為年上領御札、年迄、  
手廻り、物、かゝる、物、を、  
あつた、

書

同、  
去辰年、  
去辰年、

後之

ある、その中、

を

ある、その中、

一

ある、その中、

ある、その中、

ある、その中、

ある、その中、





海江邊  
海江邊  
海江邊

海江邊  
海江邊  
海江邊

海江邊  
海江邊  
海江邊

清室存稿

楊氏

陳壽期頤

水可

法如臨書

右園

志平叔

事新丁

1. 湯

丁

陸  
氏

新石号

月 月

山陰中書省

...  
...  
...  
...  
...  
...

...  
...  
...  
...  
...  
...

...







傳馬所

林

唐

吳

張

李

王

小

升

馬

去來轉運作三以方井所獲以極非もの  
今御市穀收より多き程に寄附し包付  
し祿より遠く

より通水ありけり 所及新に運ぶるに甘き極  
月より多き運ぶるは又より多き程に寄附し包付  
より多き運ぶるは又より多き程に寄附し包付  
より多き運ぶるは又より多き程に寄附し包付

より多き運ぶるは又より多き程に寄附し包付

より多き運ぶるは又より多き程に寄附し包付

去年今去年所  
為金方兩今日  
兼以月其春小前  
下以習うに相解

想月た

長江善左衛門

香林

以年取之乳中上者其味甘而  
 皇上物持拿大膽急求摘發一  
 中連微

別張延引、粟成山親為及、常液い

多見之  
不勝其  
多矣

卷之五

云月云

追々以旦秋果之得達以可、今平遙より秋馬山

御書に依りて  
通に  
あつた

夢

あつた  
あつた

足保  
奇伝  
大野  
あつた

道正うゝうゝうゝ

口島うゝうゝ

口島うゝうゝ

口島うゝうゝ

中島

生れ

東海うゝうゝ

なな

長島  
東口

道正

うゝうゝ

うゝうゝ

うゝうゝ



のろし  
あき

のろし  
あき

のろし  
あき

あき  
あき

あき  
あき

あき  
あき

あき  
あき

あき  
あき

あき  
あき

あき  
あき

あき  
あき

日 記

日 記

日 記

日 記

日 記

日 記

日 記

日 記

日 記

つぎのちひ

田舎のあそび

日

村田

あそび

野良

あゝ通る方一高きうりきうり

高きうりきうりきうりきうり

あゝ通る方

あゝ通る方一高きうりきうり

乙  
二  
月

長  
谷  
寺





開帳不能

傳馬町  
名主

篠山道佐兵衛  
上野新右衛門